Made in KYOTO

新芸品のディテール

伝統と革新が同居する街、京都。
どの時代も古い風習を打ち破り、そして新しい文化を生み出してきた。
21世紀に入り、伝統的な技法を活かしながらも
革新的かつアヴァンギャルドに活躍し始めているみやこびとが増えてきた。
そんなモノづくりに携わる、彼らの生みの苦しみと喜びをクローズアップする。

第31回

古都里-KOTORIライト

西堀耕太郎氏
1974年10月2日和歌山生まれ。高校卒業後カナダに留学し、いかに自分が日本文化を知らないかを痛感。日本人として、日本文化、伝統文化を伝える仕事に携わりたいと思っていた夢が、のちに京和傘職人になることで実現した。

番傘はなぜ番傘というのか？洋傘を日常生活で使うことはたくさんある。ところが和傘を日常に使う人がいたら……それは相当に風流な人だろう。

呉服需要の衰退とともに和傘の需要も激減し、今では和傘を作っている商店は全国的にみても数店しかない。まさに絶滅寸前。「和傘を何とかしたいんです」2年前のある日、京和傘の熟練職人、日吉屋5代目の西堀耕太郎氏からこんな相談を持ちかけられた。

和傘に迫りつくまで

西堀氏は生粋の京都人ではない。奥様の実家が和傘屋だったのだ。

「初めて見た和傘の印象は、なんてカッコいいんだろう、でした。こんな素晴らしいモノ作りの文化があるのに、廃業するのはもったいない。ならば僕が日吉屋を継ぎます、と」

ところが、このご時勢、和傘の需要はほとんどない状態。「そんなん食べていけへんで、と私の両親は勿論、家内の実家からも猛反対される始末。でも、祖父からの「日吉屋を頼む」という遺言を聞いたとき、日本人として文化を継承することの使命を感じました」

この言葉に、奥の胸はダグッときた。和傘を何とかしたい、その問いかけに僕も何とか応えたい。西堀氏とディスカッションしながらアイディアをひねり出した。和傘を雨の日に使う雨よけの道具としてだけでなく、もっと違う用途に。和傘作りの際に使う竹を細く等分に割ったり、その竹に和紙を貼り付けたりする匠の技を活かして、何か全く新しいモノが作れないだろうか。

プロジェクトはある日突然

そうだあの照明デザイナーとコラボレーションしてみよう。僕は早速、携帯のメモリーに登録されている照明器具のデザインで有名な東京デザインパーティの長根寛氏に電話をしてみた。結果、長根氏もこのプロジェクトに快く参加してくれた。ところが、ここからが生みの苦しみだった。長根氏が和傘を分解し、基本構造を活かしながら全く新たなデザインを提案。そしてそれを元に、西堀氏が骨組の原型となる木型を作っていく。

「和傘は本来、木型を使わずに作ります。竹の直径の大きさに応じて、フリーハンドで竹を割っていくんです。でもこの古都里-KOTORIライトを作るには、提灯と同じ方法で、基本になる木型をあらかじめ用意する必要がありました。木型がないと、等間隔に竹を配することはできない。試作を何回もやり直したのが一番苦労した点ですね。竹の骨を40本、均等に割っていくためにミリ単位で調整してやっと仕上げました。これがピシッと決まらないと、全体がバランスよくシンメトリーにまとまって見えないんです」

美しいモノ、美しい日本

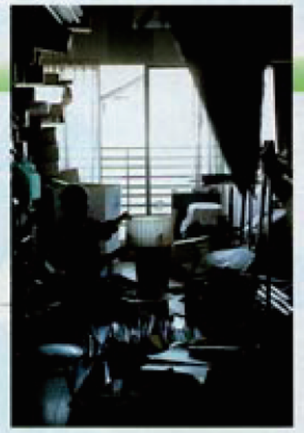
僕がこれをプッシュする理由は、匠の技を現代に活かしたユニークネスにもあるのだけれど、それ以上に、どんな空間にでもアジャストする汎用性の広さにある。日本家屋の畳の和風空間でも、安藤忠雄氏が建築設計したコンクリート打ちっぱなしのモダンな空間でも違和感のない世界観。ぜひ、これを海外のミラノサローネやメゾンオブジュなどのエキシビションに出展して、海外の人たちがどんな反応を示すのか、自分の部屋に取り付けてみたいと思ってもらえるかどうかを試したい。美しいモノと美しい日本、それを京都発のグローバル・メッセージで発信できるか、世界マーケットでどこまで通用するか挑戦してみたいと思うのだ。

そう、冒頭の番傘の意味は、番茶など日常使いのものには番という文字をつけることからくる。つまり番傘はふだん使いの傘の意味だ。この古都里-KOTORIライトも、部屋に番をつけるような照明器具になってもらいたいと願っている。

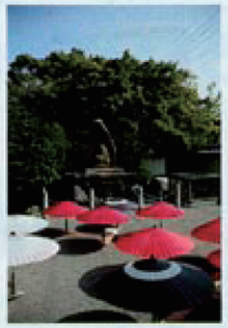
京都市上京区堀川寺ノ内界隈。この地域は茶道で有名な表千家の本部がある。日本、世界から聖地を目指して茶人たちが訪れる。

【文◎鳥田昭彦】
京都市中京区に生まれる。実家は着物に手描きする絞染工芸師。現在、東京と京都を往復しながら「fromKYOTO」を創し、京都のプロダクツを発掘、全国に世界に情報発信を行なっている。またこの春から、石井竜也氏や秋本剛氏らとともに京都造形芸術大学の講師も務めている。

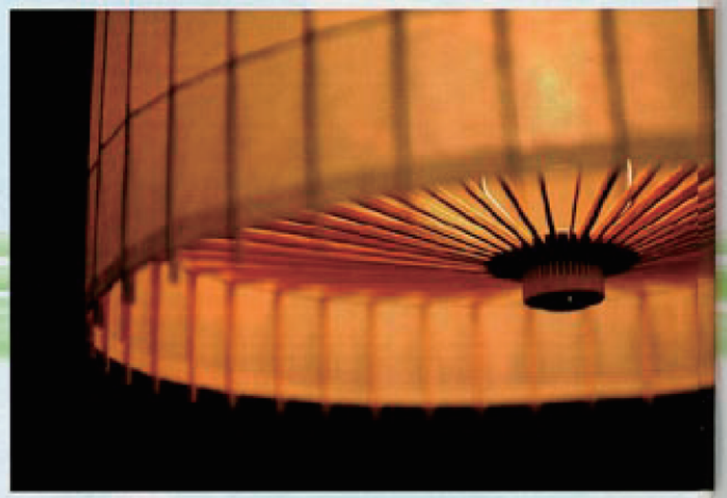
写真／内藤真保



日吉屋の店構え。2Fが工房になっている。もし仮に西堀氏が京都生まれ京都育ちだったとしたら、逆に家業の魅力を感じなかったかも知れない。外の世界から京都の伝統産業に魅力を感じたからこそ、自らの意志で飛び込んできたのだろう。先代からの伝統的手法を活かしながらも、21世紀的なアレンジを加えようとする姿は、じつに頼もしい。



日吉屋の向かいにある人形の寺、宝鏡寺。和傘は、骨に和紙を貼り付け、防水のため油引きをしたあとに天日干しをする必要がある。そのため、お寺の厚意により代々にわたり境内を借り、傘を広げている。



コンクリート打ちっぱなしの部屋に馴染まされた古都里-KOTORIライト。現代的な空間でも充分にフィットするデザインに仕上がっている。構造はいたってシンプルだ。軸受けの部分から放射状に伸び広がる竹の軸。和本来の基本製造の匠の技が活かされている部分だ。美しいシンメトリーを描いているのがお判りいただけるだろう。さらに連結され、垂直に交わる部位にも和傘づくりの技の応用が見られる。和紙も吟味した。素材感を表現する工夫が随所に。シェード本体は光具との取り外しが容易で、季節に応じてカーテンの模様替えをするように色を交換して楽しむことができる。使用時の寸法は直径388×高さ295mm、収納時は直径510×高さ330mmになる。シェードと光具一式価格6万900円、シェードのみ価格3万6750円。白、黒、赤、紫の全4色。

京都市上京区堀川寺之内東入☎075(441)6644
http://www.wagasa.com